

令和5年度

地域連携推進事業 活動報告書



九州国際大学地域連携センター

2023（令和5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

「黒崎商店街を中心とした地域の サステナビリティ・デザインに関する産官学協働事業」……………	1
法学部教授 花松 泰倫	
「八幡東区におけるアートと 多世代交流を起点とした地域づくり」……………	5
現代ビジネス学部教授 三輪 仁	
「保育園児に英語を教えよう!貸し切り鉄道の旅2023」……………	11
現代ビジネス学部教授 松井 貴英	
「包括的地域連携協定に基づく共同・協働研究」……………	15
現代ビジネス学部教授 村上 真理	
「教育のまち黒崎推進事業」……………	19
法学部准教授 藤野 博行	
「スポーツで地域交流「する」「みる」「ささえる」 ～SDGsに繋げよう～」……………	23
現代ビジネス学部准教授 木下 温子	
「防犯・防災教育及び地域安全マップ活動活性化事業」……………	29
法学部教授 姜 信一	
「学生の地域貢献意欲の向上および住民交流促進事業」……………	35
現代ビジネス学部准教授 桒畑 恭介	

2023（令和5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	黒崎商店街を中心とした地域のサステナビリティ・デザインに関する産官学協働事業
連携団体名	北九州市産業経済局商業・サービス産業政策課、枝光本町商店連合会
本学教職員氏名	花松 泰倫（法学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	黒崎商店街を初めとした北九州市内の商店街は近年その衰退が顕著であり、通行量の減少や空き店舗数の増加などに強い懸念が示されている。そのなかで、商店街の未来図を誰がどのように描き、実現していくのか、商店街を地区にとってどのような空間として位置づけていくのかについて、ステークホルダーの間で共有されるイメージや具体的計画が存在しているとは言えない。そこで本学の教員学生、商店街連合会、北九州市役所の連携によって、商店街の持続性ある未来イメージを構築するサステナビリティ・デザイン、およびそのための予備的調査やイベント企画実施による商店街活性化を目指した産官学協働事業を試みた。
取組概要	昨年度までは黒崎商店街においてヒアリング調査やイベント参加などの活動を行ってきたが、地域サステナビリティのあり方を深め近郊地域との連携をさらに広げるため、大学近郊の枝光本町商店街（八幡東区）において予備的調査を行うことを主眼とした。 本地域連携事業は、①商店街連合会を中心とした地域組織とその構成事業者、行政サービスの観点から商店街を支える北九州市役所とともに行う産官学の協働事業により、持続可能な商店街の未来を商店街関係者とともにデザインし創出する基盤を構築する、②そのための予備的調査や合意形成プロセスの実施をゼミや実習という形で本学法学部学生自身が担うことで、学生の地域社会に対する感受性と責任感、リーダーシップ力を育て、人口減少時代に対応できる人材を育成することを目的とする。 その上で、（１）枝光本町商店街の運営サイドの課題に関するインタビュー・ヒアリング調査、（２）枝光本町商店街を取り巻く枝光地区全体の現状と課題に関するヒアリング調査、（３）枝光本町商店街主催のイベント（感謝祭、定期市など）への運営参加、（４）防災まちづくり活動の可能性調査、の４つの事業を行った。

事業 (活動) 内容	<u>1. 枝光本町商店街個店・団体・企業へのインタビュー・ヒアリング調査</u> 枝光本町商店街の現状、魅力、課題等について、商店街で事業を行う個店主および商業施設企業などを対象にインタビュー調査を行った。本調査は、法学部演習科目「専門演習」(花松ゼミ)の学生13名が3グループに分かれ、7月7日(金)に10店舗・団体へのインタビュー調査を実施した。個店主の高齢化と後継者不足が認識される一方で、対面販売のみならずネット販売やイベント出店などを通して全国的な販売網を形成している人気店、リノベーション等を通して若者に人気の飲食店として注目される店が徐々に増えている傾向がある。他方で、商店街の魅力や今後の見通しについて明確な意見を聞き出すには至らなかった。商店街の内側だけではなく外側にいる本学学生の視点から商店街の魅力を発見し引き出す工夫が必要になることがわかった。 <u>(2) 枝光本町商店街を取り巻く枝光地区全体の現状と課題に関するヒアリング調査</u> 枝光地区は製鉄業の衰退によって急速に人口が減少し、現在では北九州市内の中でも比較的高い高齢化率となっており、丘陵地帯での住みにくさゆえに空き家問題も深刻になっている。枝光本町商店街のみならずそれを取り巻く枝光地区全体の現状と課題について、法学部演習科目「専門演習」(花松ゼミ)学生13名とともに、北九州市八幡東区役所コミュニティ支援課、枝光第二自治区会長の宮地久男氏へヒアリング調査を行った それによれば、地域の高齢者や子供たちを巻き込んだ自治会活動は活発で、まちづくり協議会や育成会、婦人会、北九州市立ひびきが丘小学校PTAとの連携を強化している。また丘陵地という災害に脆弱な生活環境を改善するため、九州大学大学院人間環境研究員志賀研究室の協力で危険箇所を点検するまち歩き活動を10年以上続けている。また、丘陵地帯を結ぶ乗合バス事業を地元のタクシー業者(ひかりタクシー)が展開することで高齢者の暮らしのサステナビリティを高める取り組みが全国的に注目されている。他方で、自治会活動に参加しない住民も含めて地区全体の住民の関係性をどのように作るのか、コミュニティをいかに形成するかが課題になっていることがわかった。 <u>(3) 枝光本町商店街主催のイベントへの運営参加</u> 枝光商店街では地域住民向けの触れ合いイベントを定期的かつ頻繁に開催しており、多くの地域住民の参加がある。毎月10日と20日に「市」を開催するほか、ナイトマーケット、地区内にあるひびきが丘小学校と連携した「枝光こども商店街」なども開催されている。今年度は2022年10月に発生した商店街火災への支援に対する感謝を込めたイベント(枝光本町商店街感謝祭)が2023年10月13日に開催され、法学部「専門演習A」(花松ゼミ)の学生13名が参加してイベント運営に携わった。また、12月9日には商店街「夜市」が開催され、同じく法学部「専門演習A」(花松ゼミ)の学生13名が参加してイベント運営と企画協力のため参加した。
------------------	--

事業（活動）内容	<u>（４）防災まちづくり活動の可能性調査</u> 前述のように、枝光地区は丘陵地の危険箇所を点検するまち歩き活動を行ったり乗合バス事業を展開する一方で、個々の住民に対して防災意識を高める活動を行うには至っていない。そこで、枝光本町商店街のイベント企画としてコラボレーションするかたちで、枝光地区住民を対象とした防災まちづくり活動をスタートするための予備的調査のため、岐阜大学地域減災研究センターの村岡治道氏を訪問し、ヒアリング調査を行った。
効果・結果	以上の活動により、以下の効果、結果および見通しが得られた。 ① 枝光本町商店街の個店および事業者へのインタビュー調査により、各事業者が事業を継続するに当たっての課題、商店街の未来に対してどのような展望、問題意識を持っているのかなどが明らかになった。 ② 枝光本町感謝祭や夜市への運営参加を通して、本学学生が商店街関係者や周辺住民とともに協働作業を行うきっかけを掴むことができた。特に、事業者の高齢化が進む商店街の活性化を考えるに当たっては、本学学生のような若者が実習活動の一環として予備調査やアイデア提供、当日の具体的作業を通して貢献することが十分に可能であることが実証された。 ③ 枝光本町感謝祭における企画運営およびイベントマネジメントへの参加によって、枝光本町商店街の活性化に一定程度の貢献ができた。2024年度に入ってもイベント参加にお声掛けいただくなど、九州国際大学が実行委員会のなかで欠かすことのできないステークホルダーとなっている。この貢献を基盤として、今後も商店街関係者に対する本学のプレゼンスの向上、信頼関係醸成に今後も務めたい。 以上の結果により、本学学生の教育効果を内在化させた産官学協働事業の基盤が確立し、次年度以降の連携事業の発展が大いに期待される。

活動記録



宮地久男氏へのインタビュー調査



枝光本町でのインタビュー調査



枝光本町でのインタビュー調査



枝光本町でのインタビュー調査



枝光本町でのインタビュー調査



枝光本町でのインタビュー調査



枝光本町本町「感謝祭」



枝光本町本町「感謝祭」



枝光本町本町「感謝祭」

2023（令和 5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	八幡東区におけるアートと多世代交流を起点とした地域づくり
団体名	①八幡駅前開発株式会社 ②平野市民センター
団体代表者氏名	①井上 龍子代表取締役社長 ②長野 裕館長
本学教職員氏名	三輪 仁（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	地域経済学科地域づくりコースにてゼミを担当する申請者はこれまで 8 期に渡り本助成を受け、連携先団体と協働したさまざまな地域活動に取り組み、学生が主体的に地域づくりに携わる機会を得てきた。 さらに 2019 年度より八幡東区の様々な団体・企業・機関が連携し秋の八幡をアートで彩る「やはたアートフォレスト」に参加し、毎年他の大学・組織・機関とのコラボレーション企画を実施している。 また 2020 年度以降は 4 年生が卒業研究として連携先の協力を得て地域イベントを主催し、ゼミ生全体が学年横断的にこれに関わる機会が増えている。 とりわけ本年度はコロナ禍の行動制限が撤廃された状況のなかで、どのように以前の活動を取り戻すか、高齢化がすすんだ地域においていかに持続可能なにぎわいづくりを展開するかという課題意識をもって活動を行った。
取組概要	◎本年は 2 つの連携先団体に対し、以下に挙げる活動を展開した。 ※八幡駅前開発株式会社 ・KEYAKI TERRACE YAHATA：八幡駅前～国際通りのまちおこし活動 歩道を活用したにぎわい創出 けやきテラス（フリーマーケット） ・やはたアートフォレスト ガイドブックへの協賛集め活動 けやきマルシェ in Autumn（参加企画） 八幡図書館との共同企画 ※4 年卒業研究共同プロジェクト ※平野市民センター ※4 年卒業研究共同プロジェクト ・平野塾の活動への参加 八文字カフェ ・平野文化祭(10 月 8 日)での児童向け企画実施

事業 (活動) 内容	◆KEYAKI TERACCE YAHATA 関連 ・ けやきマルシェ (5 月 14 日) 八幡駅前歩道の歩道を活用した取り組みフリーマーケット(告知、当日準備片付け、会場管理、出店など担当) ・ イルミネーション設置 11 月上旬 八幡駅前地区、本学へのイルミネーション設置 11 月 11 日 イルミネーション点灯式(八幡駅前広場)けやきマルシェ 11 月 11 日～1 月 29 日 九州国際大学内でのイルミネーション点灯 ・ やはたアートフォレスト 2023 ガイドブック作成のための協賛・協力先の開拓 けやきマルシェ in Autumn 夜間実施 荒天のため駅前の空き店舗を利用した出展ブースの設営 ◆平野市民センター ・ 八幡大空襲慰霊式典や八文字カフェへの参加 ・ 平野文化祭 (10 月 8 日) 児童向けゲームコーナー企画
効果・結果	本年度は年度開始時より感染症拡大抑制のための行動制限が完全に撤廃され、コロナ禍以前の水準で制約なく地域連携活動を展開することができるようになった。これに伴い本年度の行動目標は、コロナ禍前のにぎわいを取り戻すとともに、この 4 年間に生じた地域の担い手の入れ替わりや高齢化、その一方で SNS や IoT の進化という社会や地域を取り囲む環境変化のなかで、定例的に携わってきたイベント活動をいかに持続可能なものにするかという点が大きな課題となっている。本年度は 2・3 年生ゼミ主導で行う KEYAKI TERACCE YAHATA 関連の取り組みと 4 年生がプロジェクトオーナーとなって取り組む企画が組み合わさって、活動の多様化が大きく図られることとなった 八幡駅前地区の歩道部分の利活用の取り組みである「けやきマルシェ」は昨年度に続いて春秋開催を行った。特に秋の「けやきマルシェ in Autumn」では荒天のため屋外への出店が難しく、連携先の協力を受けて空き店舗での実施という新たな形態での実施がなされた。 平野文化祭(平野市民センター)では 2019 年以来の学生企画を実施することができた。「けやきマルシェ」については、5 月 15 日に 2 年ぶりに開催することができた。 今年度においては 2 月 17 日に八幡東区役所主催の「まちづくり学生フォーラム」において葉畑ゼミとともに活動報告と学生のパネルディスカッションの機会をいただいた。報告に向けゼミでこれまでの振り返りを行うことで、対象地域の特性を活かす、より地域を巻き込むといった今後の活動の方向性を共有することができた。

5月14日けやきマルシェ：八幡駅前歩道部



やはたアートフォレスト 2023 ガイドブック



活
動
記
録

10月8日平野文化祭：平野文化祭



11 月学内イルミネーション設置：本学中庭 JICA 向かい崖部分



11 月 11 日けやきマルシェ in Autumn・イルミネーション点灯式

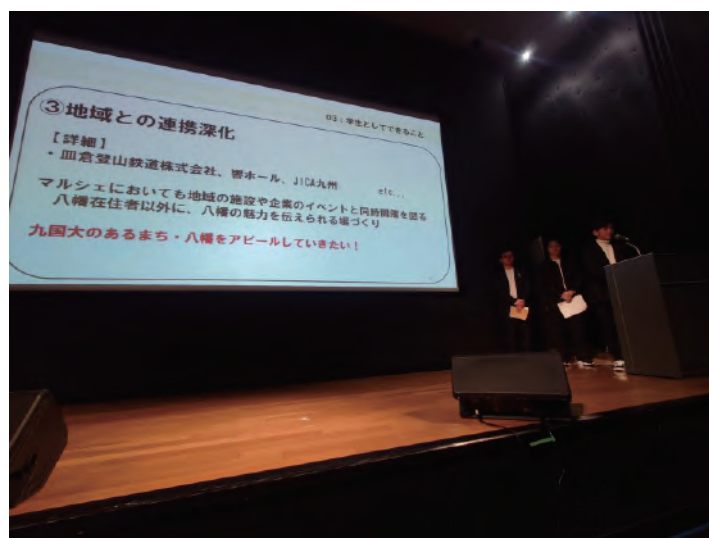


空き店舗のレイアウト



田尻ゼミ出店ブース

2月17日八幡東区まちづくり学生フォーラム：スペースラボアネックス



活動報告の模様



ゼミ活動のポスター報告

2023（令和 5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	保育園児に英語を教えよう！貸し切り鉄道の旅 2023
連携団体名	済美保育園
団体代表者氏名	園田 千奈美（済美保育園 園長）
本学教職員氏名	松井 貴英（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	国際社会学科における地域連携事業を模索する中で、2021 年度・2022 年度と英語コースの宮武ゼミの学生たちが花尾小学校や済美保育園の園児に英語を教えるワークショップをハロウィーンイベントとして実施していたため、2023 年度はローカル線の電車を借り切って車両の中でワークショップを開くという企画を考えた。 そのアイデアを済美保育園の園田千奈美園長に話したところ、ぜひお願いしたいと快諾を得たため、宮武ゼミの協力を得ながら実施するという計画を立てた。
取組概要	実施日 2023 年 10 月 28 日（土曜日） 場 所 九州国際大学、枝光本町商店街（変更の理由については後述） 参加者 本学学生（宮武ゼミ）、済美保育園の園児・保育士 協 力 枝光本町商店街 コロナ禍以降、鉄道会社が貸し切りを実施していないことが判明したため、当初の予定を変更し、本学と枝光本町商店街の二か所でワークショップを実施することとした。 貸し切り電車の中でワークショップはできなかったが、その代わりとして八幡―枝光間を電車で移動することで、ほんのわずかではあるが、電車に乗り、その中で園児と本学学生が交流をすることを試みた。

事業（活動）内容	ローカル線の電車の貸し切りの実施については、当初当てにしていた平成筑豊鉄道はコロナ禍以降実施していないとのことであったため、筑豊電気鉄道に問い合わせたところ、やはりこちらからも色よい返事を貰うことができなかったため、本学と枝光本町商店街で実施することとした。 開催は10月28日の土曜日、午前中は本学研究棟ラウンジで済美保育園の園児と本学学生によるワークショップを実施、その後電車で枝光駅まで移動し、そこから徒歩で枝光本町商店街へ。アイアンシアターの2階で昼食と仮装姿に着替え、園児たちと本学学生たちが枝光本町商店街を練り歩いた。事前に商店街のみなさまに告知しておいたため、ご厚意で園児たちにお菓子を配っていただくことができた。 そして、商店街の一角にあるオープンスペースで、園児たちは覚えたての”Trick or treat!”の正しい発音を披露し、それができた子からピニャータ割りにチャレンジし、子供たちはお菓子をゲットした。さらには商店街のみなさまもピニャータ割りにチャレンジしてくれたこともあり、単に園児のイベントというのみではなく、園児と本学学生と地域のみなさまとの交流の場を設けることに成功した。
効果・結果	このイベントは、先にも述べたとおり、コロナ禍以降（少なくともイベント実施までの時点において）平成筑豊鉄道・筑豊電気鉄道が新規の貸し切り列車の受付をしていなかったことにより、申請した内容そのままの企画を実施することができなかった。そのため、予定を大幅に変更することになった。 とはいえ、捨てる神あれば拾う神ありとでもいおうか、枝光本町商店街のみなさまからイベント実施を了解していただくことができ、さらには温かく迎え入れていただくことができたことにより、イベントを実施することができた。そのことにより、当初は本学学生と済美保育園の園児との間の交流をメインとした英語発音ワークショップの予定だったものが、枝光本町商店街のみなさまと本学学生と済美保育園の園児による交流を行う英語発音ワークショップというかたちでイベントを開催することができた。 想定外のことがあったことにより、当初の予定とは異なるイベントの実施ということにはなったけれども、結果的には当初の予定以上に地域と連携し地域に貢献することができたイベント実施できたことから、人間万事塞翁が馬とでもいおうか、よりよい地域との交流を行うことができたことは、この企画の効果であるといえるのではないだろうか。



【写真左・中・右】本学学生たちと済美保育園の園児たちの交流の様子。

写真中央の本学学生は、一年生の時はほとんど大学に来ていなかった。しかし、二年生になりこのようなイベントへの参画をとおして、大学に来るようになった。この学生の例は成功例としては稀有なものかもしれないが、学外での活動を実施することで（もちろん彼に関してはゼミの先生やゼミでの活動も大学に来るようになった理由であることはたしかなことであり、このイベントは補足的な者であるとはいえるだろうけれども）学生の退学抑制の効果があつたこともたしかなことであるといえるだろう。

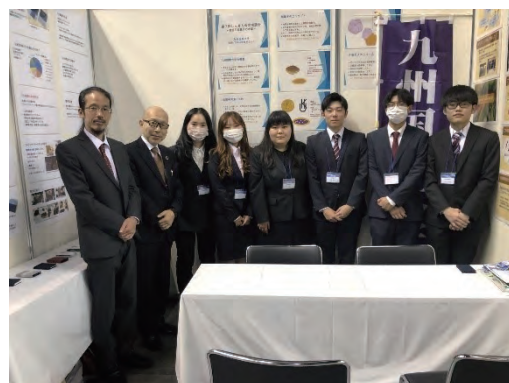


【写真左・右】枝光商店街での様子。園児たちと本学学生たちとの交流がとても良い雰囲気の中でおこなわれたことが窺える。写真右は園児たちからのお礼として、歌の披露がなされた時の様子である。

2023（令和 5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	包括的地域連携協定に基づく共同・協働研究
連携団体名	福岡ひびき信用金庫
団体代表者氏名	小茅 智弘氏（サステナビリティ推進室長）
本学教職員氏名	村上 真理（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	令和 2 年 1 月、本学では福岡ひびき信用金庫（以下、ひび信）と「包括的地域連携協定」を締結した。本協定は、地域の抱える諸課題に対して共に向き合い、様々な分野で連携・協力していくことを企図したものである。以来、現代ビジネス学部地域経済学科（経営コース）を中心に以下の共同研究を行ってきた。途中、コロナ禍による中断もあったが、概ね期待通りの成果をあげた。 ◆令和 2 年度 第 1 次研究 サービスと関係性からの実務アプローチ ◆令和 3 年度 第 2 次研究 金融機関と融資取引先との信頼とコミットメント ◆令和 4 年度 第 3 次研究 人材マネジメントに関する調査実施とデータ・アナリティクス 締結から 4 年目となる令和 5 年度は趣を変え、イベントの共催・共同参画を取組みの軸とした。具体的には『しんきん合同商談会』へのブース出展、ならびに、ひび信の取引先 10 社への支援策（企業 PR 動画制作にかかるサポート）である。これらにより本学とひび信の一体感を高めると共に、Win-Win の関係性をもって地域貢献と社会貢献に努めた。
取組概要	本報告では、令和 5 年度実施事業のうち『しんきん合同商談会』へのブース出展について詳細を説明する。このイベントは令和 5 年 11 月 8 日、マリンメッセ福岡（福岡市博多区）で開催された。九州北部地区の 13 信用金庫※が合同で行う大規模イベントで、今回も 340 社あまりが出展し、会場は大変な賑わいであった。 本学からは地域経済学科／経営コース 2 年生～4 年生の約 50 名が参加したが、会場内では、①産学連携コーナーへのブース出展、②学生プレゼンテーションでの事例発表、③人材交流会での企業担当者との情報交換、という 3 パートの何れかを担当し、それぞれに有意義な体験をした。 ※ この 13 信金で九州北部地区信金協会が組織され、ひび信も加盟している。

活動内容	(1) ブース出展 ここでのブースは商談を行うための応接室的なものである。担当は経営コースの村上ゼミで、テーマは、訪問先への手土産にできるような「贈答用オリジナル和菓子」の商品化であった。これに対し、福岡一円の菓子製造業者など10社余の来訪を受けている。また、ブース内では同じ経営コースの田尻ゼミが、同ゼミの看板活動「小倉織り卒業記念品プロジェクト」を紹介するパネルを展示し、これに興味を持った業者の飛び込みも相次いだ。担当した今國晋太郎くん（村上ゼミ2年）は「企業の方と至近距離で話すのは初めてのことで緊張しましたが、振り返れば貴重な経験でした」と話している。また、木原瑞奈さん（同）も「どの企業からも消費者にとって良いものを作りたいという熱い思いが伝わってきて、とても感動しました」とのことである。 (2) 学生プレゼンテーション 会場内に設けられた特設ステージでは、本学を含む5大学・高校によるプレゼンテーションが行われた。本学の発表者は安高弘将くん（村上ゼミ4年）と村本優香さん（同2年）。これまで本学が福岡ひびき信用金庫と共同で行ってきた研究を「地域金融機関における顧客関係性 ～関係性マーケティングの視点から～」との演題でまとめ報告したもの。終了後、安高くんは「関係性マーケティングの理論を用いて考えると、業務の可能性の幅が広がるということを強調したかったです」、村本さんは「頭が真っ白になりましたが、とても良い体験ができたと思います」と話している。 (3) 学生交流会 各信用金庫が担当する企業と福岡県で学ぶ大学生の交流を目的に、メッセ2階のサブアリーナで合同商談会と並行する形で開催された。主催はひび信、参加企業は約40社であった。参加した学生の所属は本学のほか、北九州市立大学と西南学院大学で総勢90名。午後からの2時間あまりであったが、企業の紹介と学生との交流が交互に行われる流れになっていたため、そのぶん学生の感度も高まったようである。参加者の1人、木村勝太くん（村上ゼミ3年）は「このような雰囲気では企業の方と接することができ、伺ったお話の1つ1つが印象に残っています。既にインターンシップによる就職活動を始めていますが、経験値が高まったように感じています」と話している。
効果・成果	本事業は、包括連携ならではの規模の大きい取組みを核としたもので、メッセージ性と訴求力に富む。その意味では、今後の包括連携の先行事例となるものといえよう。また、本事業に関わった学生は、地域における企業活動の実際を体験できたが、それらを通じて社会人基礎力が涵養されたほか、最終的に就職活動におけるモチベーションを高めることにも繋がったはずである。さらに、ひび信が地域金融機関であることから、金融リテラシー教育の効果もあったものと思料される。



左写真が本学のブース。正面奥に村上ゼミのテーマ「地産地消マーケティング」の解説、右側面には大学としてどのような贈答用和菓子を考えているかを説明したパネルを各掲示。右写真は、ブース担当者全員での記念撮影。左端にいるのが現代ビジネス学部の大澤健司准教授で、当日の学生引率役。



左写真は会場風景。出展企業のブースが所狭しと並んでいる。右写真は会場のほぼ中央に作られた特設ステージ。演台に着いているのが安高君と村本さんで、これからプレゼンテーションを始めるところ。



学生交流会はメッセ 2 階のサブアリーナで行われた。左写真は参加者全員による記念撮影。右写真は企業と学生との交流の様子。多くの学生には、至近距離でのコミュニケーションが好評であった。(了)

2023（令和5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	教育のまち黒崎推進事業
連携団体名	非営利活動法人北九州未来教育塾 黒崎一番街協同組合・黒崎名店街商店組合 熊手銀天街商店組合
本学教職員氏名	藤野 博行（法学部准教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	令和元年度以来、本連経費により黒崎カムズ商店街、熊手銀天街その他八幡西区黒崎地域においてイベント等を行ってきた。 しかしコロナ禍以降、新型コロナウイルス蔓延予防のための規制により商店街の客足が大きく減少し、商店街主催のイベントの開催も抑制され、空き店舗についても増加傾向にあったところ、当該規制が大幅に緩和されたことで、徐々にイベントが復活するようになってきた。また、空き店舗を埋めるための取り組みもなされている。
取組概要	昨年度実施した「黒崎おばけ屋敷」は好評であったが、お化け屋敷という特質上、一定間隔を置いて入場させなければならないなどの制限があった。また、コロナウイルス感染症関係の規制が緩和されたとはいえ、密になることは避ける必要があったため、多くの方に楽しんでもいただけないという課題があった。そこで今年度は、これらの課題の解決をするために、黒崎地区の賑わいづくりのために開催されたパン販売イベントである「黒崎シュガーパンまつり」において、屋外型の「謎解きイベント」を実施することとした。また、黒崎地区の商店街の中でも、比較的空き店舗率が高い熊手銀天街において実施された貸店舗ツアーへの協力も行った。 なお、今年度参加した受講生の一部も翌年度、入門セミナーのチューデントアシスタントに応募・採用され活躍している。 以下、両イベントに関する取り組みについて報告をする。

事業（活動）内容	(1) 「黒崎シュガーパン祭り」における謎解きイベントの開催 前述の通り、屋外型のイベントとして謎解きイベントを実施した。 今回のイベントは「黒崎探検隊 ライオンからの挑戦状」というテーマで、黒崎カムズ商店街および熊手銀天街（熊手銀天街入り口のライオンのモニュメント前まで）を往復しながら、学生が用意した謎を解いていくというものである。 当初は、熊手銀天街の空き店舗を埋めるためのイベントである貸店舗ツアー（10月14日日曜日開催分、後述。）に合わせて実施する予定であった。しかし、貸店舗ツアーは熊手銀天街において店舗の賃借を検討している方向けに開催される、集客が限定的なイベントであったことから、開催日を変更した。 準備は9月2日（土）より開始し、イベントは10月7日（日）の10時から16時に開催した。授業時間だけでは準備時間が足りなかったため、授業時間外にも有志がオンライン会議を行っていた。大学コンソーシアム関門提供科目であったことから、数名ではあるが、北九州市立大学や西日本工業大学等、本学以外の学生も参加した。 イベントの受付をシュガーパン祭りの会場である駅前ペDESTリアンデッキ上に設置し、そこで台紙と画板を受け取ったうえで謎解きを始める形とした。また、小学生対象であり、謎解きが解けない参加者が生じる可能性もあったため、謎解きに関する看板の付近に学生が待機し、解けない参加者に対応した。参加費は300円に設定し、その費用は謎解きに成功した参加者に対する参加賞（お菓子）の購入費用とした。 (2) 熊手銀天街貸店舗ツアーへの協力 熊手銀天街の空き店舗を埋めるために、株式会社全国商店街支援センター（国庫補助金を活用し、全国商工会連合会、日本商工会議所、全国中小企業団体中央会、全国商店街振興組合連合会が共同設立した、地域商業の振興を支援するための法人。令和5年12月解散。）の助成金を利用して、9月9日（土曜）、10月14日（土曜）に「熊手銀天街貸店舗ツアー」を実施した。貸店舗ツアーとは、商店街組合が主催し、テナントを探している方々を募り、商店街内の空き店舗を案内する企画であり、全国の商店街において実施されている。この企画については前年度、地域連携推進費を利用して事前調査としての来街者調査を実施していたが、それを参考にして本年度、実際にツアーを開催する運びとなり、参加者を募るためのweb広告の掲載に協力した。 広告は、googleで検索をした際に画面隅に掲載される広告（google広告）および、Instagramに掲載される広告（meta広告）を利用することとした。熊手銀天街の貸店舗ツアーに興味を示す客層・年齢・地域について、商店街の方々からヒアリングをしたうえで広告掲載の設定を行った。広告の表示回数について、商店街の会議において報告をした。
----------	---

(1) 「黒崎シュガーパン祭り」における謎解きイベント

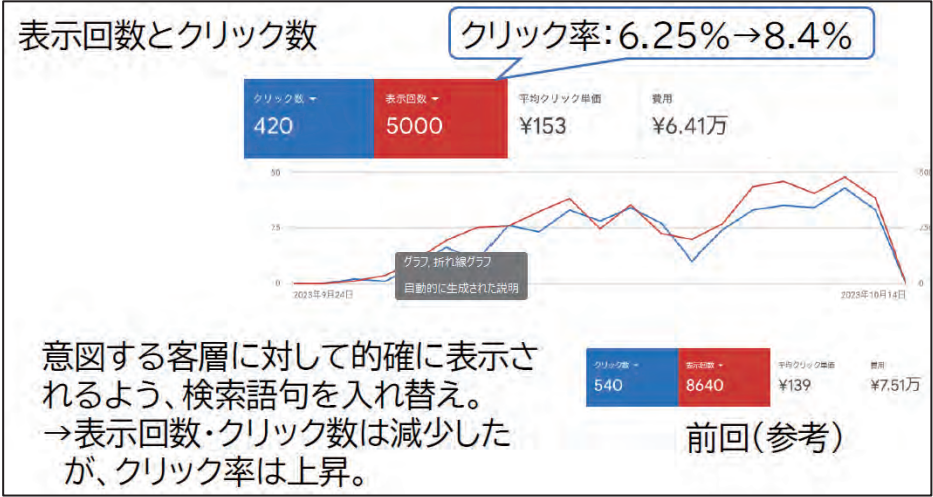
事前に web 広告により周知されていたこともあり、イベント開始前に待機している方もいた。事前に準備した参加賞はすべてなくなったものの、合計60組と、前年度のおぼけ屋敷に比較すると来場者は少ない結果となった。

しかしながら、本イベントに参加した学生のうち3名が法学部スチューデントアシスタントに応募し、現在、法学部の初年次教育の一端を担っている点は評価できる。

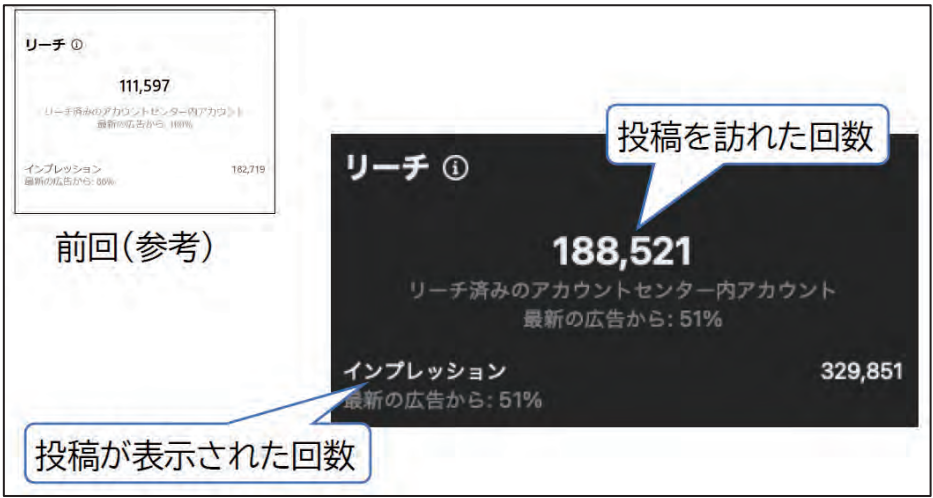
(2) 熊手銀天街貸店舗ツアー

前述の通り、空き店舗ツアーは9月、10月の2回行われた。これに対応して、広告も2回に分けて掲載した。

9月開催分に向けた広告については、google 広告が表示回数 8640 回、meta 広告が 182719 回であった。10月開催分に向けたものについては、google 広告が 5000 回、meta 広告については 329851 回であった。



10月実施分の Google 広告の結果 (商店街会議資料)



10月実施分の meta 広告の結果 (商店街会議資料)

効果・結果

(1) 「黒崎シュガーパン祭り」における謎解きイベント

打合せは9月2日(土)、9月4日(月)、9月5日(火)、10月6日(金)に実施された。なお、これ以外にオンラインでの打ち合わせが実施されている。



左上：地域連携センターでの打ち合わせの様子

右上：謎解きの設置場所について商店街で検討している様子

左下：イベント当日の様子

(2) 熊手銀天街貸店舗ツアー



左：貸店舗ツアーのチラシ

右：貸店舗ツアーの様子

2023（令和 5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	スポーツで地域交流「する」「みる」「ささえる」～SDGs に繋げよう～
連携団体名	JICA 九州、北九州市、ギラヴァンツ北九州、済美保育園
団体代表者氏名	吉成 安恵、武内 和久、石田 真一、園田 千奈美
本学教職員氏名	木下 温子（現代ビジネス学部准教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	2014 年度より大学施設、大学周辺を活用しスポーツや身体活動を通じた地域交流、健康増進を目的に子どもたちや高齢者を対象に行ってきたが、2020 年度からは新型コロナウイルス感染症対策により中止や制限つきでの開催を余儀なくされた。感染対策を講じた新しく始めた活動に加え、2023 年 5 月の新型コロナウイルス感染症 5 類への引き下げに伴い、以前に近いスポーツイベント、それ以上の活動になるように工夫している。特に、スポーツを通じて SDGs の興味・関心が年齢、性別、個人、団体を問わず広がるようゼミ、サッカー部を中心に行っている。
取組概要	① 北九州市「市民花壇」、「道路サポーター」、「公園愛護会」のボランティア活動団体として、花壇の管理、道路や公園の清掃・安全管理。8 のつく「やはたの日」をヒントに、毎月 8 日、18 日、28 日にゼミ、サッカー部の取り組みとして活動。 ② 国内・国際大会、J リーグギラヴァンツ北九州のホームゲーム、各種イベントが円滑に開催されるように、サポートスタッフ（担架要員、ボールクルーなど）としてサッカー部が協力。 ③ 済美保育園の園児（ゾウ組さん）がジャンボタクシーで来学、サッカー教室を 3 年ゼミ生が開催、その後、大学施設見学ツアーを実施。 ④ 「JFA なでしこひろば」、「JFA チャレンジゲーム」、「JFA レディース／ガールズサッカーフェスティバル」の企画運営。学生は、事前に JFA 公認コーチライセンス「キッズリーダー」を取得。 ⑤ 大学祭の集客と日頃からボランティア活動として道路の清掃・安全、花苗植付・灌水など管理している花壇を歩くコースを紹介する機会として、「駅長おすすめ JR 九州ウォーキング」に参加。「ウォーキング初心者大歓迎！ショートコース in 八幡」を企画し、JR 八幡駅、九州国際大学にあおぞら祇園街商店街を加えた 2.5 km として開催。

事業 (活動) 内容	① 北九州市ボランティア活動の助成として、440 株の花苗が配布された。ゼミでは、事前に土づくり、花壇のデザイン、立て看板などを作成、植付けは、サッカー部員も行った。国際通りの大学名のあるプレート横の花壇には、白色の花「ノースポール」に、ピンクの「ナデシコ」で「KIU」と描いた。また、さくら通りは「パンジー」と「ビオラ」で「SDGs KIU」と描いた。「D」の文字の表バランス、「S」を小さな文字にすることに難渋した。小伊藤山公園は別団体も管理していることもあり、落ち葉ひとつないくらい、いつも綺麗に保たれている。 「やはたの日」には、JICA 九州と合同で大学周辺の清掃活動を行った。2022 年度に JICA「世界の笑顔のために」を通じユニフォームを寄贈していたウガンダからのお礼状が届いていたため、この機会を通じて紹介した。 ② 2023 度は、北九州市が国際大会を誘致し、なでしこジャパン国際親善試合（9/23）、U-23 日本代表国際親善試合（3/25）が行われたため、運営スタッフとして協力した。また、J3 リーグホームゲーム 19 試合中 7 試合に 8 名が担架要員としてサポートした。大会やリーグを支える舞台裏に多くの役割が必要であり、その役割をひとりひとりが全うすることで作り上げられていることが分かり、貴重な経験となった。 ③ 園児が本学に訪れて、KIU Field 一面を利用してサッカー教室を行った。（学生が保育園に訪問して行ったサッカー教室は授業の関係で不可となった）大教室、食堂、図書館、メディアセンターなど大学見学ツアーでは、大学に園児？と、多くの学生が日頃見慣れない風景に驚きつつも、園児に声をかけたり、手を振ったり、辺りは笑顔に包まれ、ほっこりとしたひとときとなった。 ④ 月 1 回の開催を目標にしている「JFA なでしこひろば」は、サッカー部の公式戦があること、ゼミ生の多くがサッカー部であることから、場所も人員も確保が難しく、年間 4 回の実施のみとなった。一方、なでしこジャパン国際善試合の翌日（9/24）に本城陸上競技場で開催した「なでしこひろば」には選手 5 名、監督、コーチも入ることとなり、注目されるイベントとなった。各種メディアの取材も入り、テレビ、新聞でも取り上げられた。 ⑤ 「駅長おすすめ JR 九州ウォーキング」は大学祭への集客アップを狙い、大学祭の日に併せて開催した。JR 九州黒崎駅の担当者と打ち合わせし、JR 八幡駅を出発し、大学、あおぞら祇園街商店街を通る、子ども、ファミリー層向けのショートコースとして企画した。KIU Field では、体力測定、サッカーゴルフなどを実施した。
------------------	--

効果・結果	「花壇」については、土づくり、植付、灌水、施肥、花柄つみ、草取りなど多くの手はかかるが、活動中には通りかかりの多くの方に「花で文字を書いているのは斬新やね」、「いつもありがとう」、「きれい」などと労いの言葉をかけてもらうことがあり、学生のモチベーションも上がっている。また今年は、ナフコで1株100円に値下げされていたスイカの苗を学内の空き地に植えていた。すると、「わっ！スイカが実っとる！」という高校生から、「毎日の生長を楽しみに遠回りしとる！」という高齢の方まで、多くの人の話題となっており、目に留まっていることが分かった。今後は、通っただけでもワクワクする、ついつい通りたくなる道にするために、通りかかりの人も花苗を植える（1人1苗植付）など企画して、多くの人々を巻き混みたい。また、活動に関わることで、街や大学に愛着が湧き、ポイ捨てがなくなることを願いたい。さらに、身近で、信頼される大学、ホームゲームには地域の方が応援に来てくれるようなサッカー部になるように進めていきたい。 毎月3回のゴミ拾い、自主的にゴミ拾いをしてる方も多くなったこともあり、以前はゴミの温床になっていた花壇や植込みの中のゴミは少なくなったように感じている。一方、大学周辺の歩道、大学に隣接している響きホール側の通路には、毎回、手に負えない量のタバコのポイ捨てが目立つ。マナーを守ること、喫煙できるスペースを確保すること、喫煙者にゴミ拾い活動に参加させることなど、教育機関としても対策を強いる必要がある。 「JFA なでしこひろば」で初めてサッカーを経験した幼児の保護者より、「小学生になって体育の授業でサッカーがあった。運動が苦手だが、物怖じせず楽しくやれてた。」という報告があった。一般的なサッカースクールは、ルールも分からない、蹴り方も分からないという初心者が始めるのはハードルが高いと聞くことがある。本学のサッカー教室は「初心者大歓迎」であり、ヨチヨチ歩きの幼児が参加しても、別の遊びを始めても、個別に対応できるだけの数の学生コーチが揃っている。「体を動かすことは楽しい！」と体験できる場、おもいっきり動き回ることが出来る場として今後も工夫していきたい。また、なでしこジャパンの選手も参加した「なでしこひろば」をきっかけに、本学の活動が広く知られることとなったようである。JFA のアプリに加え、より多くの人に広く伝わるようなプロモーション方法を検討していきたい。 「駅長おすすめ JR 九州ウォーキング」は JR 八幡駅での受付開始 10:00 前より長蛇の列ができていた。525 名の受付に対し、270 名が KIU Field に訪れ体力測定などを行った。JR 九州によると、通常のウォーキング参加者は 1000 人程度のことであるが、数日前から開催日（11/25）の天気予報が悪天候と予想されていたこと、秋編のウォーキングコースが終盤であったため、JR ウォーキングに参加するともらえるポイントが上限に達してる人も多かったこと
-------	---

	から、通常よりも参加者が少なかったと考えられるとのことだった。とはいえ、大学祭に集客できるきっかけとなるため、大学祭実行委員会とも連携して広報などは進めていく必要がある。外から見るだけのグラウンドに入ることができて嬉しいという声もあったことから、 KIU Field をもっと生かした内容を再考したい。
--	--



写真 1) さくら通りの花苗植付

写真 2) 国際通りの除草作業



写真 3) JR ウォーキング (サッカー)



写真 4) JR ウォーキング (体力測定)



写真 5) JFA なでしこひろば (なでしこジャパンの選手とサッカーしよう！)

令和 5 年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	防犯・防災教育及び地域安全マップ活動活性化事業
連携団体名	北九州市安全安心推進課
団体代表者氏名	倉田 武（課長）
本学教職員氏名	姜 信一（法学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター・地域連携推進費
背景	九州国際大学法学部では、3 年・4 年の姜ゼミ（学外活動では KITAMAP という名称を使用）を通して、小学校の子どもたちを対象に、地域安全マップ活動を毎年実施している。九州国際大学法学部 KiTAMAP が地域安全マップ活動を実施してきたのは、すでに 10 年以上。 北九州市の小学校を中心に、大学生が大学で学んだ犯罪機会論に基づいて、通学路や普段の生活圏の中で、安全な場所と危険な場所を見分ける力をつけさせる防犯教育を行っているのである。 この地域安全マップ活動は、大学生たちが自ら企画し準備し、小学生にプレゼンテーションとフィールドワークを行う教育活動であるため、大学生にも教育的な効果が高く、特に問題解決力や協調性を高める効果がある。なお、この活動は、学内外に高く評価され、毎年北九州市をはじめとして、福岡県や北九州市外の小学校からも活動依頼を受けている。 したがって、本事業は、今までの地域安全マップ活動を持続的に行うことで、小学生の防犯意識を高め、大学生の地域参加活動を通して実践力やリーダーシップ、課題解決力を向上させるという教育的な目的がある。なお、成人を対象にした防犯教育として実施することや九州国際大学方式の地域防犯活動のためのマニュアル作成をすることまで、地域防犯事業を広げて行く目標を持っている。このような防犯教育活動を、より定着させるため、地域連携推進事業として申請するに至った。
取組概要	今年度のKiTAMAPでは、完全対面による地域安全活動や防犯教育活動を行うことができた。特に、北九州市の小学校で他大学と連携して「防犯アカデミー」「地域安全マップ活動」を実施したのは、連携活動という側面で大きな意義があると思った。

事業（活動）内容	北九州市と北九州市内の諸大学と連携して実施している「犯罪アカデミー」は、今年度は「九州共立大学」で開催され、KiTAMAPの学生たちは「防犯アカデミー」に参加した市内の大学生や関係者たちを対象に「地域安全マップ活動」の報告と指導方法についての発表を行った。特に、KiTAMAPが作成した「地域安全マップ活動マニュアル」は、今年度も他大学の防犯ボランティア学生たちや市民団体に配布し、犯罪機会論や地域安全マップ活動の普及するように努めた。 それから、地域安全マップ活動が小学生と大学生と一緒に地域を歩きながら危険な場所と安全な場所を見つけるフィールドワークが重要であるが、大雨の日は対応できない問題点があった。しかし、今年からはKiTAMAPが「犯罪機会論セミナー」などで行った写真データとクイズを通して室内で行う手法を積極的に活用して、室内で活動を完結する新しい「地域安全マップ活動」も試みて、好評を得ることができた。 ただ、花尾小学校での活動が対応できる学生数が足りなく、実施できなかったのは残念だった。 それから、今年度も福岡県警が主催する「学生防犯ボランティアサミット」に参加することができ、福岡県内の学生たちと防犯活動についての情報共有を行った。 KiTAMAP内では、市民や防犯ボランティアが理解しやすいマニュアルの改善活動も持続的に行うことができた。 今年度の活動は、コロナ禍以前のような活動に取り戻すことができたが、小学校での地域安全マップ活動の認識が薄くなるなど、課題も見つけることができた。今後も積極的な防犯活動を行っていきたい。 以上の活動についての具体的なスケジュールは、以下の通りである。 ① 4月～5月 「犯罪機会論」の学習、「地域安全マップ活動」準備 ② 5月26日 防犯アカデミー in 九州共立大学（地域安全マップ活動報告） ③ 9月29日 曾根小学校「地域安全マップづくり活動」下見・地域調査 ④ 10月6日 曾根小学校「地域安全マップづくり活動」実施 ⑤ 10月20日 大里南小学校「地域安全マップづくり活動」事前準備 ⑥ 11月10日 大里南小学校「地域安全マップづくり活動」実施 ⑦ 11月23日 福岡県警主催「学生防犯ボランティアサミット」参加 ⑧ 12月22日 大学内のプレゼン大会で KiTAMAP の「地域安全マッ
----------	---

	ブ活動と防犯活動の課題」について発表 以上のように、地域安全マップ活動だけでなく、報告、発表や情報収集活動も多数行った。
効果・結果	今年度は、北九州市内の小学校でコロナ禍以前のような対面による「地域安全マップ活動」を実施することができたのが大きな成果だと言える。 特に、他大学と連携しながら、大規模小学校で地域安全マップ活動ができたのは、ボランティア活動をする学生同士の理解を深め、協力体制を強化できるという意味で、とても有意義であった。 そのとき、KiTAMAP で作成したマニュアルについて学習することができたことや、実際に地域安全マップ活動に参加した経験のある学生たちが、後輩との交流を通して、そのノウハウを伝えることができたことなどで、小学校での「地域安全マップ活動」は、何のトラブルもなく、無事に実施することができた。「防犯アカデミー」を通して、他大学にも地域安全マップ活動のスキルを共有できたのも、このような協力活動に役に立ったと思う。 また、KiTAMAP は、雨の日に対応できる室内型「地域安全マップ活動」も工夫し、「大里南小学校」で実施した。事前準備を徹底することで、子どもたちの防犯意識を高めることができたし、地域安全マップ活動への理解度もフィールドワーク並みに高い水準を維持することができた。 今年は、「曾根小学校」「大里南小学校」等で、実際に子どもたちと触れ合いながら、地域安全マップ活動を実施したことで、子どもたちと大学生の防犯意識を高めたことは最大の成果であると言えよう（地域貢献）。 そして、KITAMAP の学生たちが年々学習した内容を蓄積し、活動自体を進化させたのも重要な意義を持つと考えられる。

1) 犯罪機会論学習



2) 北九州市主催「防犯アカデミー」



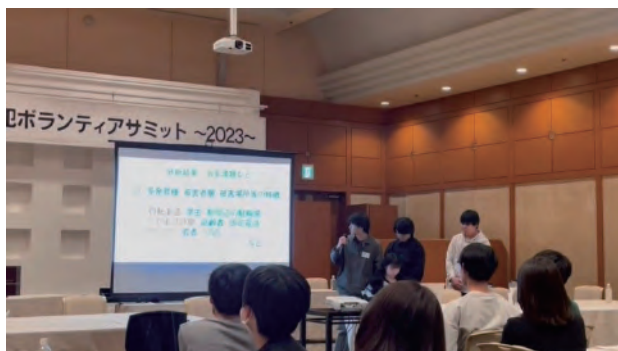
3) 曽根小学校「地域安全マップ活動」



4) 大里南小学校「地域安全マップ活動」



5) 福岡県警主催「学生防犯ボランティアサミット」



6) プレゼン大会参加



2023（令和5）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	学生の地域貢献意欲の向上および住民交流促進事業
連携団体名	中央町連絡協議会・結（YUI）
団体代表者氏名	水島 知乃歩
本学教職員氏名	栗畑 恭介（現代ビジネス学部准教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	本事業は、7年目を迎えた。連携先である八幡中央町連絡協議会・結は、中央町地区で活動している企業、NPOといった様々な地域主体が参加する組織である。一つの地域の中で、多様な主体と協働して様々な地域活動に参加することで、学生の地域貢献活動への意欲や八幡地域への愛着を醸成する機会としてきた。各取り組みに対して、多様な立場からの意見に触れることが、大きな学びともなっている。
取組概要	■里山整備作業体験と里山祭への参加 ■ふれあい菜園とその利用イベントへの参加 ■子ども食堂「ちゅうおうまち食楽福亭」への参画 ■地域警戒活動と橘祭における防災・防犯セミナーの実施

事業（活動）内容	■里山整備作業体験（5月）と里山祭への参加（11月） 里山や竹林など北九州市内の多くの自然資源の保全には人の手が加わり続けることが必要となる。そうした人との関わりによって形成された自然について考えるため、北九州里山トラスト会議のメンバーらと地域づくりコースの学生が八幡西区小嶺地区の里山で遊歩道整備などを体験した。また11月に行われた第16回里山祭においては、孟宗竹の間伐材を用いて竹スピーカーづくりのワークショップを開き、二次的自然が抱えている課題の啓発を行った。 ■ふれあい菜園とその利用イベントへの参加（11月） 八幡大谷まちづくり協議会が行っているふれあい菜園事業における多世代交流活動に学生が継続的に関わっている。要所で労働力として農作業に参加したほか、八幡小学校3年生を招いての収穫祭時には交流の円滑化を狙って多くの学生が参加した。 また多世代交流の場としての意義を深めるため、菜園を利用した収穫物を利用した調理会や子ども食堂と連携企画を提案実施した。 ■子ども食堂「ちゅうおうまち食楽福亭」への参画 八幡中央区商店街にて毎月第一土曜日に行われている子ども食堂「ちゅうおうまち食楽福亭」に参画している。毎月のスタッフとして学生が大きな役割を果たしている他、大学生発の企画やブースを運営しており、今年度は10月と12月を担当した。 10月には、多世代交流の促進を狙って誰もが当事者である「健康」をテーマとした。スポーツマネジメントコース馬場ゼミの学生に助っ人を要請し、横断歩道に相当する10メートルの歩行速度を測定するブースを設けた。高齢者からは歩行年齢を測定し生活アドバイスを実施、子どもたちや親子連れには10秒ピッタリでのゴールにチャレンジしてもらい、好評を得た。 12月には、ふれあい菜園事業で収穫したサツマイモを用い子どもたちやまち協の方々とカレー作りを楽しんだ。加えて、カレーには餃子をトッピングし、「八幡ぎょうざ」についての説明も行った。子ども食堂に参加して来る子どもたちとその保護者に対して、子ども食堂だけではなく、地域の活性化活動を広くPRする回とした。 ■地域警戒活動と橘祭における防災・防犯セミナーの実施 警戒犬の育成や防犯・防災活動をテーマとしているNPO法人K9TPGの方々と一緒に、北九州各所で、夜間の警戒活動を行った。また、本学学祭「橘祭」において、K9TPGの方を講師に防災防犯セミナーを開催した。セミナーの内容は、人さらいなど大学生が巻き込まれやすい犯罪行為の実演や、段ボールやゴミ袋を用いた体温保持など災害時に役立つ技術など実践的で多岐にわたるものであり、学生を中心とした30名ほどの参加者が熱心に取り組んだ。
----------	--

効果・結果	地域活動の担い手としての学生は、体力や発想などの力が期待できる一方、在学年による持続可能性や地域主体との信頼関係の構築が難しいなどといった懸念もある。本事業によって、学生の持続的な活動への関わりを保ちつつ、個々の学生が主体性をもって動ける体制が整えられてきた。 また、本事業は学生の学びの場としての意義も大きい。今年度は特に子ども食堂においては、学生自身が課題を見つけ、自分たちのもつリソースで解決に向けて動くことができていた。子ども食堂の目的に多世代交流が挙げられているが、高齢者が参加できる企画はほとんどなく、また参加者間の交流機会も限られていた。学生たちは、自分たちの関わってきた活動も絡めて高齢者も楽しめる催しや交流企画を提案し、実現した。 これらの成果は、2月に行われた「八幡東区学生フォーラム」にて八幡地域の方々に向けて報告した。 今後、本事業の継続により、「学生たちが活動しながら目的に照らして自分たちの役割の検討し、課題の改善策などを提案する」また、「地域の方々には、そうした提案に耳を傾け、協力・支援頂ける」そうした関係性が深まり、学生にとっての「学び」「遣り甲斐」と、「地域への貢献」の両立がなされるものと期待できる。
-------	---



竹林整備や里山祭ワークショップでの活動風景



菜園作業や収穫祭の様子



子ども食堂での調理イベントの様子



防災防犯の警戒活動やワークショップの様子

令和6年7月15日発行

地域連携推進事業活動報告書

(令和5年度)

編集発行 九州国際大学地域連携センター
〒806-0021
北九州市八幡西区黒崎3-15-3コムシティ2階
T E L 093-631-2203

印刷所 東筑印刷株式会社